

れ即ち此殘經によりて從來學者の依據せし二祀、三際等の語の以外に、新たに慕闍ムカなる語より此碑文に云へる宗教の何なるやを指定し得べきを以てなり。前出(四)に「慕闍、拂多誕等、於其身心、常生慈善、云々」と云ひ、(二)に「法主慕闍拂多誕等所教智惠善巧方便威儀進止云々」と云ひ、又た(六)に「余時會中諸慕闍等」、其他殘經十三枚右に「時慕闍等」、十三枚左に「諸慕闍等」と記せるを見る、是れに依れば慕闍なる名は明らかにマニ教徒を云へるものなること、一點の疑を容れずといふべし、されば吾人は茲に初めて彼の太平寰宇記、冊府元龜に見ゆる大慕闍のことは、吐火羅國よりマニ教を唐に輸入し、其の傳播を計りたるものなるを知るべく、従がつてフィリップ氏等が冊府元龜と舊唐書との開元七年の條を比定同一視せんとせしことは、クリスト教の東傳を稱へんが爲に、比定の條件に對して盲目なりしことを證して餘りなかるべく、又た回紇碑の記事が、疑もなくマニ教の輸入を記せるものなるを證して餘す所なきを得べし。もとより此の如きは殘經中の慕闍なる字と、以上の諸書及び碑文に見ゆる慕闍なる字とが、同一語を寫せりとの假定の下に行はるべき議論に外ならず、而して特に此假定の可能を論ずるの要は茲に存せざるべし。

たゞ尙ほ考へざる可らざるは、慕闍がマニ教徒を表はす語なるに於ては疑ふ所なしと雖、然かも廣く其の教徒を指せる語と見る可きや否やにあり、慕闍或は大慕闍を以て人名と見たる學者の説の誤まれるは、殘經を一讀すれば明らかにして、茲に之を説くの要なかるべし、思ふに此の語マニ教徒を稱するものとするも、特に其の僧侶の一階級か、或は僧侶其の物を呼べるものなるべし、是れ冊府元龜に大慕闍を遣はして、之れに諸教法を問はんことを請ひ、且つ此人を供奉せしめて以て其の宗教即ちマニ教を傳播せんと試みたるものなるを記するより考がふれば、も